

## 見せかけの主への信頼

ミカ書3章

しかもなお彼らは主に寄り頼んで、「主はわれわれの中におられるのではないが、だから災はわれわれに臨むことがない」と言う。(11)

ミカが預言していた時代の世の中は正義が完全に失われていて、全ては富を有している者たちに都合の良いように動く社会となっていました。

正義を社会に示すはずの法廷では、裁判官たちが金持ちの望むような判決を下し、偽預言者たちは多額の謝礼を払った者たちに対して彼らが喜ぶような言葉を聞かせていました。彼らの不真実は人間に対してだけでなく、神に対しても同様でした。裁判官、祭司、預言者たちが私腹を肥やすために不義を働きながら、なお平然と主に寄り頼んで、「主はわれわれの中におられるではないか、だから災はわれわれに臨むことがない」と言ってはばからなかつたのです。彼らの霊的な感覚がいかに鈍っていたかがよく分かります。自分たちの罪には目をつぶりながら、あたかも信仰深いかのような言葉を平気で口にするのできる感覚、主への恐れというものを完全に失ってしまった彼らの実態を表しています。そしてこの病いは、現代の教会の中にも入り込んでいないでしょうか。主が求めておられることは、真実をもつて主の前に出ることなのです。

見せかけの主への信頼は、いざという時には何の役にも立ちません。わたしたちの内から主への不真実を取り除き、偽りのない心で主に向かおうではありませんか。